

Ⅰ

- 問一 (1) 負担 (2) 矯正 (3) 破綻 (4) 秩序 (5) 崇高

問二 自分の中に良くないところがあることを、(たとえ、その指摘を受けても) そういうものは存在しないかのように、自ら(の意志で) 思い込むこと。

問三 「益」には、不快であっても公正に自らの欠点を指摘してもらおうような「益」と、不正であっても欠点の指摘などは受けず、ほめられる(美化される)ことで、喜ばせてもらおうような「益」があるが、(私と他者が相互に錯誤を求め合うのは) 前者ではなく、後者を求めているということ。

問四 人は、心地よくいたいために、自らの欠点や目の前にいる人の欠点を明らかにしたくないと望む傾向を持っているが、それは、気づいている「悪」を見逃し、真理を隠そうとするから、理性や正義から隔たっている。

Ⅱ

問一 「僕」は進との関係が対等ではないことに内心では気づいているものの、一週間ぶりの学校で以前とは違って楽しい時間を過ごしたこともあって、仲間外れを怖れて子分のように話をさせられていると思うのは、自分がみじめで、認めたくなかったから。

問二 未だ充分なじみのない潔に、あからさまに花林糖が食べたいから寄越せと自分の欲望を示し、命令をすることがはばかられるのに、山田にその思いを露骨に代弁されたことが照れくさく、ごまかしたい気持ち。

問三 磯介の中で、自分を特別扱いしようとしてくれている潔のために、進の本当の姿を教えてやりたい思いと、もしその話を潔にしたことが進に知れた場合の自分の身の上を案じる気持ちとが葛藤していたから。

問四 磯介の話から、進をやっつけることなどできないと分かった今、「僕」に残されているのは進の機嫌を取り続けるか、あるいはたとえ仲間はずれになっても心に忠実にふるまうかの二つであり、結局は前者を選ぶほかないと悟り、暗い気持ちになっている。

Ⅲ

問一 (1) ア (2) ウ (3) イ

問二

(a)北面の下臈は夫に対し返事をすることもできず、おめおめと馬から降りて、夫を連れて法皇のもとに参上した。

(b)どうして身の程に応じた望みがないことがあるか。いや、あるはずだ。

問三 音無河で音もなく咲き始めた梅の花よ、匂わなければどうしてその存在を知るだろうか。いや、知ることはできないはずだ。

問四

①「をり」に「花を折り」と「馬を下り」を掛け、「なりさがり」に「実が成つて下がり」と「身分が下がり」を掛け、「み」に「実」と「身」とを掛けている。

②身分が低いために、馬から降りずに尋ねられるわが身がつらいという心情。

問五 語り手(作者)の、伊勢国の夫が秀歌二首をよんだ褒美として、後嵯峨法皇から税を永代免除されたことに対する、思いがけないほど大きい褒美だと驚く気持ち。

Ⅳ

問一 失われる書物はあっても、失われる口伝はなかった。

問二 華南と華北とで場所を異にし、夏王朝と周王朝とで時を異にするにもかかわらず言葉が伝わるのは、必ずしも書物によるわけではなく、口伝にこそよるのだ。このように、時間や空間の隔たりを超えて情報を確実に運び伝えるという点において、口伝による伝承は書物によるそれにも勝る機能を有している。

問三

能及_レ漆簡_一、而不_レ能_レ及_二伏生之口_一

問四

いづれかかたき(か、や)

いづれかかたからん(か、や)

問五 書物が失われても口伝はのこる。ならば、書物は不要かといえ、必ずしもそうではない。口伝も時に失われることがあるからである。口伝が失われたとき、書物がのこつてさえいれば、人々はそれをふたたび口頭で伝えることができる。書物が存在することで、口伝も復活するのである。このように、口伝と書物とは相互に補完し合い、依存し合うような関係にある。